

# 高等学校国語教科書における和歌教材の記載方法 について 一題詞・詞書・左注から考える一

岩田久美加

## 一 はじめに

これまで、様々な方面から国語の教科書所収の和歌に関する論考がなされてきた。例えば、教科書の内容調査に関しては、西一夫<sup>(1)</sup>は「国語総合」における『万葉集』『古今和歌集』所収歌の状況を調査し、その問題点を指摘、佐藤愛・高橋優美穂<sup>(2)</sup>は「国語総合」における三代集の採択状況を調査、仁野平智明<sup>(3)</sup>は「国語総合」と中学三年「国語」の重複和歌テキストと調査し、その重複性を活かす提案をしている。また、新たな指導案の提案としては、新井隆<sup>(4)</sup>の『古今和歌集』を和歌集としてよむことで配列を意識させるものや、佐々木俊臣<sup>(5)</sup>の和歌を用いた古典文法指導などがある。新たな教材提案としては、曲踏踏・中村敦雄・野坂友里・堀口琢朗・山口仁見<sup>(6)</sup>らの視覚的教材をとり入れた中学国語における教材、井實充史<sup>(7)</sup>の和歌の修辞とその効果を学習する中学三年から高校一年の教材、小林賢太<sup>(8)</sup>の私家集の和歌の教材化などがある。また、「言語文化」を想定したこれまでの教科書採用テキストを用いた読み比べ教材の新たな開発<sup>(9)</sup>もすでになされている。そして、梶川信行ら<sup>(10)</sup>によって、『万葉集』所収歌の教材化の様々な問題も指摘されている。

ところで、先にあげた論考以外にも、教科書所載歌における「詞書」に関する問題点を指摘する論もある。小野美典<sup>(11)</sup>は、①勅撰集の和歌の解釈においては、部立(=主題別分類)によって歌意が異なることもあるにもかかわらず、その記載がない教科書があること、②同じ和歌でも『小倉百人一首』のように詞書がないものと、詞書のある勅撰集所載歌として解釈するのでは歌意が異な

るにも関わらず、その区別を截然と区別する視点の欠けている編集があることを指摘し、「国語Ⅰ」<sup>(12)</sup>の歌集教材を持つ24冊のうち10冊(42%)が詞書と部立に問題点があることを指摘している。また、徳植俊之<sup>(13)</sup>は、中学校の国語の教科書に関して、「基本的に和歌本文と作品名のみを挙げる形」で掲載しているが、詞書の伝える作歌事情を押さえることが和歌の理解には必要であると具体例をあげて指摘している。

これら「詞書」の必要性を指摘している論考は、古典教育を考える上で重要な指摘や提案がなされているが、旧学習指導要領のもとで書かれたものである。しかし、平成三十年(2018)七月に高等学校の新しい学習指導要領が告示され、大幅な改定<sup>(14)</sup>がなされたがこれまでの二つの学習指導要領下においても「詞書」に関する問題は未だ解決されていないようであり、なおかつ新しい学習指導要領下における「詞書」に関する問題は未だ調査されていないのが現状である。また、『万葉集』の教科書記載歌の方法については、西一夫<sup>(15)</sup>や梶川信行<sup>(16)</sup>などが論の中で触れているが、それだけでなく「詞書」・「題詞」・「左注」といったものを含めた形でのまとまった形での先行研究は存在していない。従って、本稿では、この「言語文化」と「古典探究」<sup>(17)</sup>の教科書を対象として、新たに「題詞」「詞書」「左注」および「作者」の記載状況の調査を行い、それに基づき教科書における和歌の掲載方法について考えたい。なお、便宜上『万葉集』については「題詞」を用い、それ以降の和歌については「詞書」というタームを用いることとする。

## 二 教科書における「題詞」「詞書」「左注」の 掲載状況について

対象とした教科書は、後ろの〔表1〕に示したように現行の言語文化で和歌教材(狂歌を含む。以後全て同じ。)を掲載する教科書9社16冊(掲載和歌は105首〔のべ323首〕)と、〔表2〕に示した古典探究の令和2年検定済教科書9社14冊(掲載和歌175首〔のべ325首〕)である。また、言語文化と古典探

究あわせた掲載和歌は 231 首 [のべ 648 首] である。なお、「題詞・左注なし」とは、「題詞もしくは詞書及び左注もない」ことを表しており詠作事情を一切記さない和歌、「題詞なし」「左注なし」「詞書なし」は出典元にはそれらが記されているが、教科書掲載時にはないもの、「作者なし」は出典元においては作者が判明しているが、教科書掲載時には記されていないもの（但し、題詞などが教科書に掲載されており、そこから作者が判明するものは除く）をさしている。また、該当する和歌がない場合は、ブランクとする。また、今後教科書を示す際には、「東書・言文 701」のように出版社名の略称と教科書の記号・番号で表記する。

まず、全ての和歌が、「詞書・左注なし」である三省堂・言文 704、東書・探究 701 は、掲載和歌が全て『小倉百人一首』の和歌である。『小倉百人一首』は、もともと詞書も左注もないままで鑑賞することを要求している作品であり、省略ではないので今回は扱わない。また、東書・言文 701 も「詞書・左注なし」であるが、大岡信による解説文とともに掲載されている。従って、題詞または詞書、左注はないが、和歌を理解する上で必要な題詞または詞書、左注に記されている作歌状況については解説文で紹介されており、それらの代わりに働きをしていると見なして、ここで詳しく見ることはしない。また、大修館・古探 706 と大修館・古探 708 に《本歌》として載せる和歌が四首あるが、これは本歌取りの和歌のもとのうたとして掲載されており、いわば注扱いであり、今回は扱わない。

次に、題詞、詞書、左注などがいないものは以下の通りである。なお、言語文化と古典探究と共通して記載がない和歌があるため、言語文化と古典探究とを分けずに全て記載<sup>(18)</sup>する。なお、I については論の展開の関係から後掲する。

- A 紫草のにはほへる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも
- B 多摩川にさらす手作りさらさらになにその児のここだかなしき
- C 筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき児ろが布干さるかも
- D 足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継ぎ橋やまず通はむ

- E 信濃路は今の壘道刈株に足踏ましむな沓履けわが背  
 F 韓衣袖に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして  
 G 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思もせず  
 H わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず  
 J 父母が頭かきなで幸くあれて言ひしけとばぜ忘れかねつる  
 K 夏の野の繫みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ  
 L うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば  
 M 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも  
 N ちはやぶる神代も聞かず竜田川から紅に水くくるとは  
 O 津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり  
 P 秋風は立ちにけらしな更級や姥捨山の夕月の空  
 Q にほどりの葛飾わせの新しほり汲みつつをれば月傾きぬ  
 R この里に手まりつきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし  
 S たのしみは珍しき書人に借りはじめ一ひらひろげたるとき  
 T わが酒の限り見えたるふらすこに人の命も悲しかりけり  
 U 女郎花口もさが野にたつた今僧正さんが落ちなさんした  
 V 歌詠みは下手こそよけれ天地の動き出だしてたまるものかは

ここで、A～Zの所収家集によって、時代別に分類すると、上代 A～L 11首、中古 M・N 2首<sup>(19)</sup>、中世 O 1首、近世 P～V 7首という状況である。従って、教科書の教材本体として扱われている和歌について改めて分類すると次のようになる。

上代	A～L	11首
中古	M・N	2首
中世	O	1首
近世	P～V	7首

ところで、先に記したが、言語文化と古典探究の教科書掲載和歌は、231首〔のべ648首〕である。そのうちの22首が題詞や詞書などが未記載で、作歌事

情の解説もないというのは、約9.5%である。しかし、近世和歌に関しては、言語文化に掲載はなく、13首〔のべ19首〕の和歌の掲載があるが、その半数以上が詞書などの未記載状態であり、全教科書掲載和歌における題詞などの未記載の割合と比較すると約5倍である。また、題詞や左注などが記載されない和歌は、中古・中世の和歌については、あわせて3首であることと比較して、上代の和歌に関しても、中古・中世の和歌と掲載歌数はさほど変わらないにもかかわらず、題詞などの記載がない和歌の数は中古・中世の和歌の場合より格段に多いと言えよう。

ここから、題詞や左注などが記載されない和歌には、時代的な偏りがあるように思われる。従って、次章より、教科書における近世・上代の和歌の題詞や詞書、左注の記載状況について確認し、そのような記載をすることによる、和歌の学習に及ぼす影響を考えてみたい。

### 三 教科書に記載される近世和歌の場合

まず、賀茂真淵の次の和歌から検討していく。

Q にほどりの葛飾わせの新しぼり汲みつつをれば月傾きぬ

この和歌は、桐原・古探 721 のみが掲載している和歌で、『賀茂翁家集』には「九月十三夜、県居にて」という詞書が四首前にある。この和歌は、もともと前四首とともに明和元年（1764）九月十三日に日本橋浜町の真淵の自宅である県居に人々を招いて歌会をした際の詠<sup>(20)</sup>である。従って、詞書から「にほどりの葛飾わせの新しぼり」を酌み交わしているのは、「十三夜」の「お月見」であることが分かり、日常の月を詠むのとは異なることが判明する。従って、詞書なしでのこの和歌の理解することは不十分だといえよう。

次に、良寛の和歌を検討する。

R この里に手まりつきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし

この和歌は、古探・数研 709、古探・数研 711、古探・明治 713、古探・桐原 721 と三社4冊の教科書に掲載されているが、どの教科書も詞書を載せていな

い。しかし、『布留散東』には十一首前に「国上にて詠める」という詞書があり、その後「国上の 大殿の前の」「国上の山に 家居して」という表現が用いられた長歌を含む和歌が連ねられており、その中には当該歌の「この里に」のように、「この園の」「この宮の」といった現場指示語を含む和歌がある。良寛は、寛政八年（1796）、三十九歳の頃に帰郷した後に、国上山の五合庵などいくつかの居を転々としており<sup>(21)</sup>、この和歌は、国上山の麓の乙子神社の社務所に居住していた時期によんだと思われるとの指摘<sup>(22)</sup>がある。従って、この和歌の「この里」というのは、国上山山麓の居住地付近の里をさしていることは明らかである。従って、この和歌も詞書なしで理解することは不十分だといえよう。

次に、橘曙覧の和歌を検討する。

S たのしみは珍しき書人に借りはじめ一ひらひろげたるとき

この和歌は、明治・古探 713 にのみ掲載されている和歌である。橘曙覧の作品の中においてもっとも著名な、「たのしみは～とき」という表現形式が共通する「独楽吟」五十二首とよばれる歌群の中の一首で、同歌群の次のような作品も数研・古探 709、数研 711、桐原 721 では「独楽吟」という詞書とともに掲載されている。

たのしみは空暖かにうち晴れし春秋の日に出でありくとき

たのしみはまれに魚煮て見等みながうましようましといひて食ふとき

この「独楽吟」という詞書は、「自分独りの楽しみを吟ずる」という意であろう。すると、「独楽吟」の詞書のもとの一群の和歌は「(他の人にとってはどうでも良いけれど)自分は楽しいと思う時」を詠んだものということになる。そのように考えると、この「独楽吟」という詞書は詠作者の詠作目的を端的に表現しており、和歌の理解には必要不可欠なものであろう。だからこそ、この和歌以外の「独楽吟」の和歌を掲載している教科書はこの詞書を記載していると考えられる。

次に、宿屋飯盛の狂歌を検討する。

V 歌詠みは下手こそよけれ天地の動き出だしてたまるものかは

この狂歌は、「ある人に詠みてつかはしける」との詞書を付して明治・古探 713 には掲載されているが、桐原・721 では詞書が省略されている。しかし、詠んだ狂歌を人に遣わすということは、コミュニケーションの道具として機能していることを意味しており、贈られた相手がどのような反応をすることを狙って贈ったのかを考える必要が出てこよう。そこまで考えて、この狂歌の風刺や諧謔性が明らかになるだろう。そのように考えると、やはりこの狂歌においても必要な詞書いえよう。

ところで、次にあげる三首は、掲載する全ての教科書で詞書が省略されている。

P 秋風は立ちにけらしな更級や姥捨山の夕月の空

T わが酒の限り見えたるふらすこに人の命も悲しかりけり

U 女郎花口もさが野にたつた今僧正さんが落ちなさんした

T「ふらすこ」U「女郎花」は、詠歌の発端となった素材<sup>(23)</sup>を記し、P「秋の歌とて」は、季節詠であることを示している。これらは、詞書がなくても、歌意がぶれることはほぼない。しかし、XY を掲載する桐原・古探 721 は、中古・中世の和歌には全て詞書を付し、また近世の和歌や狂歌でも詞書を付しているものもある。また、P を掲載する明治・古探 713 も同様である。そのような掲載状況を考えると、これらの和歌のみ詞書を付さないことにより、学習者に詞書の有無に関する疑問を抱かせる可能性もあると思われる。

以上より、近世の和歌で、詞書などが省略されている和歌の中には、必ずしも詞書がなくても解釈が可能な PTU のような和歌もあるが、QRSV のような詞書が必要不可欠な和歌も存在していた。中古・中世の和歌においてはほぼ詞書や左注が省略されていないという教科書記載の方法が確立されている状況とは、大きく異なっていよう。これは、近世和歌の教科書掲載が少ない<sup>(24)</sup>ために記載方法が確立していないことによるものと考えられる。

## 四 教科書に記載される上代和歌の場合

まず、A～L (Iは後掲) 十二首のうち、B～J 九首、つまり3/4が東歌と防人歌という東国関連の作品であり、題詞などの未掲載和歌に偏りがあることを指摘できる。それ以外の三首のうち、次の例は題詞がない理由も分かりやすい。

K 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ

この和歌の題詞は「大伴坂上郎女の歌一首」である。四冊の教科書に掲載されているが、明治・古探 713 は題詞を載せていない。しかし、作者は記載されている。従って、題詞が表現するはずの内容、つまり作者は教科書に記載されており、特に問題はない。

次に A の和歌について検討する。

A 紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも

この和歌は、全ての教科書で以下の和歌の次に掲載されている。

天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌

あかねさす紫草野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

言語文化・古典探究あわせて 10 冊の教科書に掲載されている。題詞は「皇太子の答ふる御歌 明日香宮に天の下治めたまひし天皇、諡を天武天皇と言ふ」で、「明日香宮に天の下治めたまひし天皇、諡を天武天皇と言ふ」については記載のないものもあるが、作者であり、掲載している全ての教科書に作者名は記載されているので、省略しても問題はない。ところで、左注「紀に曰く、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に縦獵す。時に、大皇弟・諸王・内臣、また、群臣、皆悉く従ふ」といふ」の記載があるのは、大修館・古探 706 と大修館・古探 708 だけである。左注の内容として大切なのは、日時の「五月五日」、場所の「蒲生野」、出来事の性質「葉狩の公式行事」をそれぞれ示す内容である。従って、桐原・言文 717 のように、この和歌の前にある額田王の題詞の「遊獵」に、「ここでは、五月五日に儀式として行われた葉草採り」などと左注の内容



を簡潔にしたような注記があれば、左注がなくても問題はない。但し、大海人皇子の和歌もその前の額田王の和歌もともに表現だけ見れば、「君が袖ふる」や「人妻故に我恋ひめやも」といった恋情を訴えるものであるが、宴席での当意即妙の笑いを誘う和歌であり、「雑歌」の部立に分類されてることを示す「雑歌」という部立名は記載が必要不可欠である。

次にLの和歌について検討する。

L うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば

この和歌は、言語文化・古典探究あわせて11冊の教科書に掲載されている。詞書「二十五日に作る歌」は全ての掲載教科書に記載されている。しかし、左注「春日遅々として鶺鴒まさに啼く。悽惻の意、歌にあらざれば撥ひ難きのみ。すなはちこの歌を作り、もちて締諸を展べき。ただし、この巻の中に作者の名字を併はずして、ただ、年月、所処、縁起のみを録せるは、皆大伴宿禰家持が裁作る歌詞なり。」に関しては、左注の後半部分「ただし、この巻の中に作者の名字を併はずして、ただ、年月、所処、縁起のみを録せるは、皆大伴宿禰家持が裁作る歌詞なり。」は、どの教科書にも記載はないが、作者については記載があるので、左注のこの部分に関する記載については省略されても問題がない。その一方で、「春日遅々として鶺鴒まさに啼く。悽惻の意、歌にあらざれば撥ひ難きのみ。すなはちこの歌を作り、もちて締諸を展べき。」については、東書・言文702、大修館・古探706、大修館・708のみが記載しているが、他の教科書は記載していない。ところで、この和歌は、「うらうらに照れる春日にひばり上がり」という明るい春景を前に、ふと「心悲しも」という感慨を抱き、その理由を考えてみると「ひとりし思ふ」ところにあった、ということであり、春景を前にした自らの悲愁に深く沈潜し、その原因を「ひとり思ふ」ところに見出した上で、その原因に思い至ることによって一層の孤独に沈んでいくという構図を描いているとの松田聡<sup>(25)</sup>の指摘は首肯すべきであろう。そして、「春日遅遅 卉木萋萋 倉庚喈喈 采芣祁祁」(小雅「出車」)もしくは「春日遅遅 采芣祁祁 女心傷悲 殆及公子同歸」(国風・邶風「七月」)を典拠としている左注は、「春日遅々として鶺鴒まさに啼く<sup>(26)</sup>」という状況の中で「悽

憫の意」に襲われ、それは歌でなくては払うことが難しいので「この歌を作」ったというこの和歌の作歌事情を説明している。また、春景の孤独について中国詩学からの影響など様々な論<sup>(27)</sup>が出されてはいるが、結局この和歌の「ひとり思ふ」の内容ははっきりとはしていない。このような和歌について、吉村誠<sup>(28)</sup>は、家持が「悲しい」という気持ちや「独り」とはどのような気持ちであるか自由に考えさせる「万葉集で教える」教材であるとした上で次のように述べている。

ただ欲を言えば教科書において左注も併記すべきではないか。前にも述べたように東京書籍のみが左注を訓読文<sup>(29)</sup>で加えている。自由に読み取らせることはよいが、少なくともこの歌は左注に補足説明がついている。そして左注と歌本文との対比が一番問題になっており、中国文学との関係で読み解こうとする論が一般的である。

指摘する通りであるが、それ以外にも、この左注によって、「歌を以て悲しみを除く」という意識が当時存在したことも注目できる。そのような歌論意識は、憶良から家持が継承したものと指摘<sup>(30)</sup>がされており、奈良朝における「和歌のあり方」のひとつであり、現代における創作の契機にも通じるものであり、学習者が古典に対して親しみを感じるきっかけになると考える。以上より、この和歌において、左注の掲載は必要であると考えられる。

次に BCDE の東歌について検討する。

- B 多摩川にさらす手作りさらさらになにその児のここだかなしき
- C 筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき児ろが布干さるかも
- D 足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継ぎ橋やまず通はむ
- E 信濃路は今の墾道刈株に足踏ましむな沓履けわが背

B は言語文化の教科書十冊に掲載され、「右は、武蔵の国の歌」という左注が東書・言文 702 と大修館・705 のみに付されている。C は、筑摩・古探 715 のみ掲載しているが、『万葉集』にある「右の二首、常陸国の歌」という左注やそれを反映した注などは付されていない。D は大修館・古探 706、大修館・古探 708 に左注「右、下総国の歌」とともに掲載されている。E は、第一・古探

717、第一・古探 719、第一・古探 720 に掲載されているが、「右の一首、信濃国の歌」という『万葉集』にある左注は付されていない。これより、D 以外の東歌については、左注を付さない場合が多いことを指摘できる。

ところで、東歌が収められている『万葉集』巻十四は、国が判別する「勸国歌」と国が判別しない「未勸国歌」によって形成されているが、和銅六年（713）の撰進の詔による『風土記』の郡名や郡の登場順序も『延喜式』と一致することから和銅年間（708～15）までさかのぼると考えられている「延喜式的国郡図式」に基づく国別分類がなされており、都から近い順に整然と配列され、よみ込まれる地名も街道筋に偏っている。<sup>(31)</sup> 従って、東歌は、都の視点によって体系的・集中的に収集・編纂され、巻十一・十二の大和歌謡圏の歌と対応的・並列的に形成されたと指摘<sup>(32)</sup>されている。このように考えると、教科書掲載の東歌の左注—「右の○首、××国の歌」という様式を基本とする—は、『万葉集』の編纂が都の視点で行われたことを示すものであり、東歌を『万葉集』の一巻となすことで「東国」が文化的に律令国家の成員（王民）として同質であることを保障しつつ、「東歌」という名称が示すように「東国」は独立した文化的存在でありながら、国家があたかも「東国」の民衆的世界の内実を掌握しているかの如く装って<sup>(33)</sup>編纂されている巻十四の文学史的位置付けを端的に示すものである。つまり、東歌は当時東国に存在した歌謡群のもつ多彩な発想を源泉としつつも、筆録を通して定型短歌体とし形成された「貴族文化の一支流」<sup>(34)</sup>であることである。教科書掲載の東歌は全て勸国歌であることから、最適な教材であるといえよう。以上より、左注は必要<sup>(35)</sup>である。

次に、FGHJ の防人歌について検討する。

F 韓衣袖に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして

G 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思もせず

H わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず

J 父母が頭かきなで幸くあれて言ひしけとばぜ忘れかねつる

但し、教科書掲載の防人歌で次に載せる和歌については、省略はなかった。

I 我ろ旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむ我が妻かなしも

教科書掲載の防人歌はF～Iの五首で全てである。Fは三省堂・言文703、第一・言文713、第一・言文714に、Gは言語文化三冊、古典探究一冊に、Hは筑摩・古探715に、Iは大修館・古探706、大修館・古探708に、Jは言語文化の教科書四冊と古典探究の教科書三冊に、それぞれ掲載されている。その中で、FとHは題詞・左注・作者名も記載がない。しかし、『万葉集』においては、Fは「右の一首、国造小県郡他田舎人大島」と、Hは「右の一首、若倭部身麻呂」との左注がそれぞれ付されている。Jは言語文化の大修館・言文705、明治・言文711、筑摩・言文712以外の言語文化一冊、古典探究三冊は、「右の一首、丈部稲麻呂」との左注が付されて記載されている。また、Iは先にあげたように全て「右一首、玉作部広目」との左注が付されて掲載されている。また、Gは題詞・左注・作者の記載がないが、『万葉集』においては、「右八首は、昔年の防人の歌なり。」と付された左注指定の範囲に該当する和歌である。このような教科書における掲載状況から、防人歌の作者表記は省略される傾向にあることが指摘できる。つまり、実際に作者があるにもかかわらず、それが記載されないのである。なお、教科書掲載の左注が付いていない防人歌の場合、教科書の作者が表記されている位置に「防人歌」と記されていることが多い<sup>(36)</sup>。これはここまで検討してきた近世や防人歌以外の『万葉集』の和歌ではなかったことである。

ところで、『万葉集』の防人歌は巻十四に五首と巻二十に九十八首が所収されており、そのうち巻二十所収の「天平勝宝七歳乙未の二月に相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等が歌」八十四首には、作者名等が左注に記されている。巻二十はいわゆる「家持歌日誌」の内部で、家持の「防人が情の為に思ひを陳べて作る歌一首」など防人に関する和歌の間に挟み込まれるように、日付順に防人歌が国ごとに分割して収められ、その各国末尾に「二月某日一某国防人部領使一官職位階一×××一進歌数〇首一但拙劣歌数△首不取載之」という様式が基本の左注が付されているが、伊藤博<sup>(37)</sup>は四四三〇番歌の左注「二月廿二日信濃国防人部領使上道得病不来。進歌数十二首。但拙劣歌者不取載之。」に関して「二月廿二日」だけしか家持の手許に提出された資料にはもともと記さ

れておらず、その後を家持が書き加え、これ以外の左注についても部領使の名までが部領使の筆で、進上された歌数以下が家持の付けた注釈であると指摘し、それを踏まえて鉄野昌弘<sup>(38)</sup>は「家持が、自らに対して部領使たちが「進」ったと記すとは考え難」く、「少なくとも形の上で、「進」る相手は天皇乃至朝廷でなければならない」と述べ、公文書として提出されたものであるとした。その上で、朝廷が防人に和歌を作らせ「進」らせたのは、防人に対して武器をもって防衛に当たる国家にとって重要な任務を負う官僚組織にある者としての心を持っていることの証明を求めたからであり、そのために防人は自身の肉声でそれを述べねばならず、東国方言でひたすら家族との別れを惜しみ、悲しむという「悲別之情」をうたい、いかに辛苦を耐え抜いて防人に出てきたかを嘆くことによって大君に対する忠誠の証を示したのであり、それは一人一人の大君に対する忠誠の証であるから、たとえ集団の中で歌われたとしても「集団歌謡」とはいえず、天平勝宝七歳の「諸国の防人等の歌」八十四首においては不要と思われるような東国人の姓名を付して録されたのだとした。つまり、「公」権によって、自己の家族や郷土への思いという「私」情を述べるように仕向けられたことによって『万葉集』の防人歌が形成されたのだと鉄野<sup>(39)</sup>は論じている。このように考えると、防人歌における作者<sup>(40)</sup>は、律令制下における防人のあり方やそれを踏まえて防人歌を理解するためにも欠くべからざるものであることは明らかである。また、Gの「昔年の防人歌」は、天平勝宝七歳の「諸国の防人等の歌」八十四首以前にも防人歌の収集が行われたことの証左となるものであるが、そのためにも左注を付すか注を付ける必要はあると考える。

以上より、上代の和歌で、題詞などが省略されている和歌の中には、Kのように作者が教科書に記されていれば必ずしも題詞がなくても解釈が可能なものがあるが、BCDEFGHIJLのように左注が必要なものや、Aのように左注の内容を注で付した上で部立を明記するならば左注がなくても理解可能な和歌も存在していた。そして、教科書掲載の上代の和歌の記載方法の特徴のひとつとして、KとIを除き教科書掲載の和歌の中で左注の省略がないものはなく、『万葉集』の和歌の左注は省略される傾向<sup>(41)</sup>にあるといえよう。しかし、Aや

Lは左注の内容を踏まえなければ和歌を解釈するのは難しく、また、東歌は発想の源泉は東国の歌謡群に求められるかもしれないが定型短歌体に都の視点で形成されたものであり、防人歌は防人の「創作」ではあるが内発的に行われたのではなく国家の要請によってつくられた定型短歌体の作品であることを、端的に示すのが左注であり、東歌や防人歌の作品世界を理解するためには必要であることを確認してきた。AやLの左注が省略される理由は、学習者に左注の理解が難しいとの判断によるもの<sup>(42)</sup>であろうし、東歌や防人歌の左注が教科書において省略される理由は、東歌について「東国地方の歌。庶民生活を反映した民謡風の作品が多い」と注を付した上で、『万葉集』の説明として「作者は、天皇・皇族や貴族から、防人ら庶民層に及ぶ」と記述する東書・言文702などは、いまだに庶民によるうただとの認識があり、防人歌には作者が付記されたものもあるが民謡のようなものであるから、作者名はあってもなくても同じであるとの認識からなのではなかろうか。しかし、先に確認したように、律令国家体制の一翼を担う人間として、その名は重要なものであった。つまり、「東歌」や「防人歌」に対する教科書編集者の認識が、四十年前と変わらず、「東歌民謡説」などが更新されていないことによるものだと考えられる。

## 五 まとめにかえて

ここまで、教科書掲載和歌における題詞や詞書、左注の省略を上代と近世の和歌についてみてきた。近世和歌に関しては、近世和歌の教科書掲載が少ないために記載方法が確立していないことにより省略されてしまったものがあったが、省略されては和歌などの理解が行き届かないことがあることを確認した。また、上代の和歌に関しては、省略される多くは東国にゆかりを持つ「東歌」や「防人歌」であったが、それらは「庶民」の作品として捉えており「貴族文学の一支流」との認識の欠如があったためと考えた。これら二つのことを考え合わせると、近世の和歌や上代の和歌—この場合『万葉集』—は、教科書記載に関して、中古・中世の「貴族文学である和歌」とは別物であるという認識が

働いているために、中古や中世の和歌においては詞書・左注・作者という三点セットがほぼ漏れることなく記載されているにもかかわらず、『万葉集』や近世の和歌においてはそれらの掲載方法が採用されていないのではなかろうか。もちろん、歌合などの場で中心的であった題詠による和歌作成が発達し、詞書の重要性が強く認識されている中古や中世の和歌と上代や近世の和歌とは、作者層も披露される場も大きく異なる。しかし、確認してきたように「東歌」も「防人歌」も「貴族文学の一流」と位置付けられており、近世の和歌も、「貴族文学である和歌」から解放され庶民に広がったものであり、狂歌も和歌を母体として発生した文芸であるといえよう。そのように考えると、上代から近世の和歌を一連のものとしてとらえ、教科書における掲載方法も題詞（または詞書）・左注・作者を記載するというように統一することによって学習者もひとつの和歌史というものが実感できるのではなかろうか。そこには、学習者の理解度に応じた削除が必要だという論もあるだろうが、『新学習指導要領解説』の「言語文化」3内容〔知識及び技能〕の（2）我が国の言語文化に関する事項のイにおいて「古典世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。」とあり、そのためには、小野美典も指摘する<sup>(43)</sup>が、「教材は出来るだけ原典に忠実な形で学習者に表示」することによって、背景などが理解できるのではないかと考える。

<sup>(1)</sup> 「古典和歌教材研究―「国語総合」所載の万葉集・古今和歌集の活用―」『人文科教育研究』32号（2005年5月）

<sup>(2)</sup> 「高等学校「国語総合」における三代集の採択状況」『日本大学大学院国文学専攻論集』第11号（2014年9月）

<sup>(3)</sup> 「『国語総合』和歌教材における伝統的な言語文化の指導の可能性―中学3年・国語「国語総合」教科書間の重複和歌テキストを中心に―」『解釈』五・六月号（2015年5月）

<sup>(4)</sup> 「和歌ではなく和歌集として読む授業―『古今和歌集』を読むこと及び恋歌の学校間贈答―」『駒場東邦研究紀要』4号（2015年3月）

<sup>(5)</sup> 「「生きた古典文法」をめざして―和歌を活用する指導の試み―」『中京国文学』33号（2014年3月）

- (6) 「〔伝統的な言語文化〕の可能性—中学校国語科教材の検討と開発を中心に—」『群馬大学教育実践研究』29号（2012年）
- (7) 「系統性を考慮した中学校・高校和歌教材の開発—鑑賞の土台となる抒情様式の理解を指して—」『福島大学人間発達文化学類論集』26号（2017年12月）
- (8) 「教科書の和歌教材—〈勅撰集〉と〈私家集〉—」『日本文学』六七・五（2018年5月）
- (9) 井實充史「外国文化との関係を理解するための和歌教材の開発—高校「言語文化」を想定して—」『言文』（2021年3月）
- (10) 梶川信行編『おかしいぞ！国語教科書』（笠間書院）2016年
- (11) 「国語科教育における古典和歌の指導—現行教科書の和歌教材が抱える問題点—」『語文』第104輯（1999年6月）
- (12) 旧学習指導要領（1989年3月）によるものと思われる。
- (13) 「中学古典和歌教材の再検討—古典和歌教材に詞書は不要か—」『教職課程センター紀要』第1号（2016年12月）
- (14) それまで必修科目であった「国語総合」（4単位）が「現代の国語」（2単位）と「言語文化」（2単位）に分割され、選択科目の「国語表現」（3単位）「現代文A」（2単位）「現代文B」（4単位）「古典A」（2単位）「古典B」（4単位）が「論理国語」（4単位）「文学国語」（4単位）「国語表現」（4単位）「古典探究」（4単位）となった。
- (15) 西注（1）前掲論文
- (16) 「研究へのいざない 万葉歌を読む（21）教科書の中の万葉歌—東歌を読む—」『語文』第153輯（2015年12月）、「研究へのいざない 万葉歌を読む（23）教科書の中の万葉歌—防人歌を読む—」『語文』第156輯（2016年12月）、「研究へのいざない 万葉歌を読む（25）教科書の中の万葉歌—大伴家持の春愁歌を読む—」『語文』第158輯（2017年12月）、「研究へのいざない 万葉歌を読む（28）教科書の中の万葉歌—山上憶良の罷宴歌を読む—」『語文』第161輯（2018年6月）
- (17) 「古典探究」については、「令和3年度に実施した高等学校用教科書の検定関係資料」として公開されているものを教科書図書館にて調査したものである。
- (18) なお、本文は『万葉集』に関してはCD-ROM版『万葉集』（和泉書院）を、その他の和歌に関しては基本的に『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』『和歌文学大系』のそれぞれの本文を用いたが、適宜私に改めたところがある。
- (19) この二首及び中世の一首に関しては、左注の長さなどの関係によって省略されたと考えるが、今回は上代と近世の和歌を中心に考察するので、今回は取り扱わない。
- (20) 『和歌文学大系 晩華和歌集 / 賀茂翁家集』（明治書院）当該歌の脚注参照。
- (21) 『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー）「良寛」参照。



(22) 『名歌名句辞典』（三省堂）当該歌の項目参照。

(23) このTUの詞書については出題されたものとは確認できないため歌題ではないと判断した。

(24) 教科書検定実施開始後で、近世和歌が教科書に掲載されるのも時代的に遅い。

(25) 「大伴家持の春愁歌」『家持歌日記の研究』（塙書房）2017年10月

(26) ここは、「春日遅遅 卉木萋萋 倉庚啾啾 采繁祁祁」（小雅「出車」）もしくは「春日遅遅 采繁祁祁 女心傷悲 殆及公子同歸」（国風・邶風「七月」）を典拠としているが、「倉庚」は「鶯」であるので、Lの「ひばり」とのズレが指摘されてきた。しかし、この左注自体はLのみにかかるものだとしても、「春日遅々として鶴鶴まさに啼く」という状況の中で「悽惻の意」に襲われたのは、Lの前に配されている次の二首から連続する状況を述べたものであり、矛盾するものではないという松田注（25）前掲論文の指摘する通りであろう。

二十三日、興に依りて作る歌

春の野に霞たばびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも

わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕へかも

(27) 中西進「自然」『万葉の詩と詩人』（弥生書房）1995年、辰巳正明「天平の歌学び」『万葉集と中国文学』（笠間書院）1987年など。

(28) 「明快な「読み」のない歌—大伴家持「春愁歌」—」梶川信行編『おかしいぞ！国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』（笠間書院）2016年11月

(29) 2010年の『学習指導要領』にもとづく東京書籍の教科書をさしているか。

(30) 松田注（25）前掲論文

(31) 田辺幸雄『万葉集東歌』（塙書房）1963年

(32) 伊藤博「東歌—巻十四の論—」『万葉集の構造と成立 上』（塙書房）1974年

(33) 品田悦一「東歌の文学史的位置づけはどのような視野をひらくか」『国文学 解釈と教材の研究』平成二年五月号（1990年5月）

(34) 品田悦一「万葉集東歌の地名表出」『国語と国文学』昭和六十二年二月号（1986年2月）

(35) 梶川注（16）前掲論文「研究へのいざない 万葉歌を読む（21）教科書の中の万葉歌—東歌を読む—」『語文』第153輯（2015年12月）では「国別にまとめられていることを示す左注を削除したら、地方色が薄らいでしまうのではないか」としているが、稿者は律令国家体制の中に組み込まれた東国という地方ということを教えるのに必要と考えている

(36) Gの桐原・言文717は「作者未詳」と記されているが、このGは先に見たように「昔年の防人歌」であり、個人名は判明していない。

(37) 「防人歌群」『万葉集の歌群と配列』下（塙書房）1992年

(38) 「防人歌再考—「公」と「私」—」『万葉集研究』第三十三集（2012年）及び「大伴家持の防人関連歌」『万葉集研究』第三十五集（2015年）

<sup>(39)</sup> 鉄野注 (38) 前掲論文

<sup>(40)</sup> 梶川注 (16) 前掲論文「研究へのいざない 万葉歌を読む (23) 教科書の中の万葉歌—防人歌を読む—」『語文』第 156 輯 (2016 年 12 月) では、「普通ならば、歴史の中に埋もれてしまう古代東国の庶民の名が、こうした形で奇跡的に残っているということも、『万葉集』の顕著な特色に他ならない」としているが、「奇跡的」ではないと稿者は考える。

<sup>(41)</sup> 志立正知は、「国語教育における「古典」」『日本文学』64 号 (2015 年 1 月) で、高等学校の「国語総合」「古典 A」の教科書に関して「いずれの教科書でも『万葉集』の左注は記載されない。集本来のものではないとの判断によるか」と推測している。

<sup>(42)</sup> 吉村注 (28) 前掲論文など参照。

<sup>(43)</sup> 小野注 (11) 前掲論文

[表1] 令和2年度検定済み「言語文化」教科書

略称	記号	番号	教科書名	出版社	採録歌数	註・左注し	題詞なし	左注なし	詞書なし	作者なし
東書	言文	701	新編言語文化	東京書籍	6	6				
東書	言文	702	精選言語文化	東京書籍	30			1		2
三省堂	言文	703	精選言語文化	三省堂	22			1		2
三省堂	言文	704	新言語文化	三省堂	10	10				
大修館	言文	705	言語文化	大修館書店	22					2
数研	言文	707	言語文化	数研出版	22			2		2
数研	言文	708	高等学校言語文化	数研出版	21			2		2
数研	言文	709	新編言語文化	数研出版	13					
文英堂	言文	710	言語文化	文英堂	12			2		1
明治	言文	711	精選言語文化	明治書院	25		1	2	1	
筑摩	言文	712	言語文化	筑摩書房	30			3		2
第一	言文	713	高等学校言語文化	第一出版	29			3		2
第一	言文	714	高等学校精選言語文化	第一出版	29			3		2
第一	言文	715	高等学校標準言語表現	第一出版	12					
第一	言文	716	高等学校新編言語表現	第一出版	12					
桐原	言文	717	探究言語文化	桐原書店	28			3		
計					323	16	1	22	1	17
歌の種類					107	16	1	8	1	3

[表2] 令和3年度検定済み「古典探究」教科書

略称	記号	番号	教科書名	出版社	採録歌数	註し 書・注し	題詞なし	左注なし	詞書なし	作者なし
東書	探究	701	新編古典探究	東京書籍	12	12				
東書	探究	702	精選古典探究古文編	東京書籍	28					
三省堂	探究	704	精選古典探究古文編	三省堂	16					
大修館	探究	706	古典探究古文編	大修館書店	24				5	
大修館	探究	708	精選古典探究	大修館書店	24				5	
数研	探究	709	古典探究古文編	数研出版	19			1	1	
数研	探究	711	高等学校古典探究	数研出版	19			1	1	
文英堂	探究	712	古典探究	文英堂	14					
明治	探究	713	精選古典探究古文編	明治書院	33		1	1	3	
筑摩	探究	715	古典探究古文編	筑摩書房	36			2		1
第一	探究	717	高等学校古典探究古文編	第一出版	23		1			
第一	探究	719	高等学校 精選古典探究	第一出版	23		1			
第一	探究	720	高等学校 標準古典探究	第一出版	23		1			
桐原	探究	721	探究 古典探究 古文編	桐原書店	31				5	
計					325	12	4	5	20	1
歌の種類					185	12	2	2	12	1